

2 1 1

こんにちは。TOPの大井です。

5期生 M さん受験戦記第3回です。

その話は M さんにも響いたようでした。それでも彼女はまだやり切ろうとはしませんでした。

入試が近づき、私は毎年その学年で一番頑張った子をキャプテンに任命するのですが、それは別の生徒(TR くん)でした。そしてついに1月の本番を迎えましたが、そんな徹しきらない日々は結果にも表れました。

女子御三家前哨戦と目される 1/14 の併願校、浦和明の星中で M さんはまさかの不合格でした。明の星が×で桜蔭中に受かった生徒はかつていません。

その時の彼女の 1036 番という受験番号を見て言いました。

「1036、『天を見ろ』だ。M、このまま自分だけの受験、ひとりぼっちの受験で終わっていいのか？Mの天はこんなに低くないだろ？」

天とは、TOP で小 6 になった初回授業で必ずやる、自分が全てを尽くして懸けたい対象、自分の理想のありようのことです。

もしかしたらそこからが、彼女の本当の始まりだったのかもしれない。

【・・・そんな私を見て、天が最後の手助けをしてくれた。天を見ろ。私ははっとした。天を見ろ、そこでx。という事はまだまだ天を見れていない。188(桜蔭)ではまだ分からない。このままでいいのか。今までゆるみつづけていた気持ちが少しキュッとなった。】

(合格体験記・原文まま)

私はそんな一つ一つが、彼女の中に積もっていくことを祈りました。そしてあらゆる局面で彼女を励まし、叱咤し、勇気づけました。

そして、ついに翌日が桜蔭中入試という最後の日、出陣式の日がやって来ました。

田宮が全員で朝9時に始めると明言していたにもかかわらず、Mさんは30分も遅刻してきました。これには田宮も血相を変えて怒っていました。

「とりあえず最終日は最悪のスタート。だからこそ俺たちが支えてやるしかないのかな。」そう田宮からメールが来たのを覚えています。最終日もみんなでやりきり、出陣式で1人ずつが意気込みを語りました。

Mさんは今までと違いました。これまで見たことがないくらいに涙を流しながら、話しました。

「明日桜蔭に挑戦するという今日、一番思うのは、自分がどれだけの人に支えられてきたかです。先生、クラスの戦友、家族。その人たちへの感謝を合格という形で返したい。明日受かって来ます！」

Mさんは幼いところもあったけれど、鈍感ではありませんでした。Mさんをはじめ5期生は、最後になって急速にチームとしてまとまりを見せるようになったのです。

(立教新座・東邦大東邦と格上の学校でいくつも合格を重ね、1月4校で全勝したTYくんはその代表的存在です。)

(次回につづく)

2020年6月20日

大井雄之